《修士論文要旨》

明末清初期の蔵書家の活動と出版

佐長俊和*

この論考で取り扱う問題は、明末清初期の出版文化についてである。

「出版文化」は、印刷文化の影響の下、漢字文化・儒教文化を生み出した、中国・朝鮮・日本を中心とした地域における木版印刷を主とする出版、それを支える作家・作品・出版者・書肆、或いは為政者の言論政策などを含む、多岐に渡る概念である。

本論では、明末という「出版文化」が隆盛した時代を取り上げ、知識人と出版の関係に着目し、「出版文化」とともに発達した蔵書家を、知識人の存在形態の一つとして捉える。その際、明末清初期の江南における著名な蔵書家である、毛晋を中心に考察し、蔵書家が「出版文化」にどのような影響を及ぼすのか、蔵書と出版の関わりについて論ずる。

宋代以降、木版印刷は発達を続ける。その中でも明末清初期という時代は出版文化の画期である。この時期、公的な事業による出版（官刻）、家譜や個人詩集などの私的な出版（私刻）、営利目的の出版（坊刻）を問わず、それまでと比べて格段に、世の中に出回る書物の数が増えたとされる。

この出版文化の拡大は、知識人層のあり方の変化と関連する問題である。明代の知識人層は官僚経験者である郷紳に加え、生員・挙人といった科挙を志す途上の人、士人と呼ばれる者が現れる。彼らは地域社会に在る有力者であり、様々な影響力を持った。このような知識人の多くが、様々な場で、出版と関わりを持ち活動する。明末清初期の「出版文化」にはこれが顕著である。

知識人は科挙制度によって生み出された特殊な階層の人々である。彼らは科挙に及第するという目標の為に読書し、この読書に伴う書物収集が個人蔵書の始まりとされる。個人蔵書は明末の出版業の発達と共に成長してゆく。出版業の発達は出版物の増加をもたらし、それに伴い、書物の収集も容易になった。書物収集の方法が、手間のかかる鈔写から購買へと変化していったのである。また、出版業の発達と同時に、出版を生業とする者も増えてくる。この中には、科挙に及第するという目標からはずれ、文字を操る能力を活かして進んで著述業に従事する者も現れる。このような人々の多くは挙業書・小説などの営利出版に活躍する。

このような明末清初期の知識人の多くは、科挙を通じて蔵書活動を

平成16年度　*文学研究科文化財史料学専攻

行い、書物の生産・伝播・保存などに貢献している。そうでなくとも、営利出版物の著述という、それまでにあまり無かった分野での活動を行ない、書物生産の方面での活躍をしていく。

明末清初期の「出版文化」を担った知識人の中で、有数の蔵書家であり、最大の出版家であるのが毛晋である。

出版家とはいうものの、毛晋の出版は純粋な営利出版とは言えず、坊刻の分野で活躍する者達と少し違った趣を持つ。毛晋の蔵書楼を汲古閣といい、出版もここに刻工を住まわせるかたちで行なわれる。毛晋が手掛けた出版の内容は広く、経書・史書・詩文・文集・戯曲など、様々な分野に及ぶ。また毛晋は蔵書家としても有名であり、その豊富な蔵書、特に宋元本のコレクションを、「十三経」や「十七史」の校勘、刊行に活かしている。

経書の校勘などにみられる。毛晋の汲古閣での活動自体は、蔵書家として普遍的な活動であるといえる。その中で毛晋について特殊性を挙げるならば、出版事業の規模の大きさ、彼が生員身分のまま出版活動を続けていた事、そして、汲古閣の刻書が営利出版の要素を含んでいたことである。また毛晋は銭謙益をはじめとする様々な著名人と蔵書などを通した交流があり、それが大規模な出版事業を支えたのである。

毛晋の活動は、蔵書家が出版に携わるという、明末清初期におこった現象の一つの例である。蔵書家による出版活動は、明末以前は限られた人々、例えば大学者や大官僚といった肩書きを別に持つ蔵書家のものであり、その内容も私的な詩集・家譜・年譜など、営利出版となり難いものである。毛晋の出版活動は半個人半営利の性格を持ち、それまでの蔵書家の出版とは異なる。また、官僚経験者などが主な担い手であった蔵書行為を、生員といった身分で行う事が出来たのは、明末清初期の蔵書の特徴でもある。これを可能にしたのは、知識人同士の幅広い交流、明末における知識人特権の拡大、商業の発達による江南の繁栄といった、明末清初期の知識人社会の変化が大きく関わるだろう。

以上のように、明末清初期の蔵書家の出版活動は、出版物の増加を下支えするものであり、この時代の出版文化の隆盛は、知識人の社会・学問に大きな影響を及ぼすものであったことが窺える。